

阿修羅の川音を共感覚で捉える人

安永圭子第三詩集『音を聴く皮膚』に寄せて

1

安永圭子さんは、身近な自然や事物を直視しているが、いつのまにか次元が異なる幻想領域というか、霊的な存在に促された詩を書き残してしまう詩人だ。そのことは第一詩集『いのちいっぱい咲くからに』を読んでいて気付かされた。しかしこの一九九九年に刊行された第一詩集は、発行が詩誌「飛天」であったこともあり、発行部数も少なく、多くの人の眼に触れられることはなかったらしい。私も読む機会がなかったが、今回初めてその詩集を読んでみて、宮沢賢治とも似た尋常ではない幻想力が溢れてくるのを感じた。詩「紅葉の中の爪」が安永さんの詩の魅力を良く表わしているので引用してみる。

紅葉の中の爪

爪にやすりをかける
細く鋭く
ゆつくりとマニキュア液をぬる

妖気をさそう赤色
呪いのようにフーと息を吹きかける
出来ばえを眺めれば浮き浮きして
握ったり開いたり
指がなにかをつかみたがっている

猫が鼠を捕まえてみせに来た
排水口から現れるのを
待ちかまえていて爪でおさえこんだのだ
啞えて来て目の前にポトリと落す
ぐつたりしている鼠を
ひっくり返したり爪をたてたり
さんざん遊んでゆつくりと喰べたあと
たんねんに爪のそうじをしている

女は妖艶に笑い
流れの傍の岩屋に誘った
旅の男はすぐについて来た
川を渡る手助けをたのむと
背中をかしてくれた
腕をまわしてしがみつく
すかさずその胸に短刀をつき刺し
懐から抜き取った財布をにぎりしめる

血に染まった赤い爪
冬が来る前に村へおりよう
最後の獲物と思つた男に
みやぶられ逆に刺し殺された

鮮血をまき散らしたような紅葉の中
流れにそって歩くと歎びに血が騒ぐ
赤いマニキュアの指先で
陽気な男たちを誘っては濡れてきたが
思いがけない殺意の淵がまつていて
男のナイフに刺しつらぬかれようとは
無意識な爪あとを彼の背中に残し
流れに沈む

倒木の枝先に一枚の紅葉がゆれている
阿修羅の川音にささやかれながら

この詩は、誰かが赤いマニキュア液を爪にぬっている時に発想したのかも知れない。または紅葉が川を流れていくのを見た時だったかも知れない。赤いマニキュアの爪から猫が鼠をいたぶりながら平らげてしまう様や、紅葉の川流れから娼婦の死体が流れていく様に、場面を転換していく安永さんの想像力は、不思議な魅力を放っている。生きていくものが他の存在を殺して生き永らえている赤裸々な原型を浮き彫りに

している。安永さんは傍らの自然や存在物の奥底に潜む生の衝動のようなものを大らかに提示しているだけなのだろう。それゆえ自らの詩に書きたいことを書くというシンプルさが、詩行に自然なリズムを生み出し、リアリズムの視線がいつのまにか異次元の幻想空間になっているにもかかわらず、その転換に気付かずに読まされていることになるのだろう。安永さんは詩を書く前には、昔から絵を描いていたそう。その絵について第一詩集の跋文の解説を書いた磯村英樹さんは次のように紹介している。安永圭子の「絵は写実的ではない。日常の表層の奥の意識の深層から掬いとってきたイメージを華麗な色と形で表現する」と記している。磯村さんは安永さんの絵を人間の深層をイメージ化していると評価している。そしてそのような精神性が詩においても生かされていて「人間の始源的な感覚を大切なものにおもい」、「花には花霊を、樹には樹霊を感じとって詩を書く」としている」と安永さんの特長を的確に指摘している。安永さんは詩誌「飛天」で敬愛する師である磯村さんや詩友の田上悦子さんに励まされながら詩作を続けてきたのだろう。その成果がこの完成度の高い第一詩集だったのだ。

安永さんは「阿修羅の川音」に耳を澄ませているのだが、決して人間の苦悩を前面に出して悲愴にならないで、生きることや存在することへの感謝が感じられる。それは人間の存在をもっと広い森羅万象の観点からや、例えば宮沢賢治の「宇

宙意志」にも近い視線から見詰めているように思われる。そんな人間の限界を突き抜けて、人間の究極の姿を垣間見ている詩「いい匂いのする骨」を引用してみる。

いい匂いのする骨

厚く散り敷いた落ち葉の上を歩く
足の裏に秋の深まりをたしかめ
かかどが埋まるままで踏み鳴らす
無へ向うはさまの静かさを破りけちらして
スキップする

朽葉がめくれ

微生物や小動物の死骸が見える

雑木林の落ち葉はけものの匂い

桜並木の落ち葉は甘い匂いがする

犬が顔を背中をこすりつけころげまわっている

「花の下にてわれ死なん」とうたったのは西行だった

桜の根元でごろりと横になり死んだふりをする

わたしは土にかえる時どんな匂いを出すのだろう

このまま埋もれてしまいたい

木の葉がかけ寄り耳もとで

「人間臭い」と笑う

わたしは突然掘り出され陽に曝されたミニマスのように
身をくねらす

落葉の匂いで犬が狂う

ときには人も狂う

秋が染めあげた綾織物の下で

肉は土に溶け 白く残された

いい匂いのする骨になりたい

私たちは落葉の上を散歩すると、何か静謐な安らぎの思いがわきあがってくる瞬間がある。その晩秋はこの世の生あるものの儚さを感じる時なのだろう。安永さんは落葉に寝転びながらそのような思いに捉われる。さらにそこで木の葉がしやべり出し「人間臭い」というささやきを聞いてしまうのだ。この木の葉との対話を自然に幻視してしまうことが安永さんに詩的精神の表われであることは確かなことだ。幻視したもののから促される詩作は、本来的な詩人には欠かせないことで、安永さんはそのような詩神（ミューズ）から呼ばれる詩人だと思われる。

2

第二詩集『七月六日の赤い空』は二〇〇六年に刊行された。この詩集は、安永さんの感受性を前面に出している第一詩集

とは異なり、甲府空襲の体験を中心にしたリアリズムの詩集だった。私にも送られてきてすぐに読んだ記憶がある。その頃に『原爆詩一八一人集』を翌年に出すために、私は原爆詩を書いている詩人の詩篇を集めていた。安永さんの第二詩集だけを読んだ人たちは、安永さんをきつとりアリズムの戦争と平和を考えている詩人だと理解しただろう。私も安永さんをおのように理解していた一人だった。私は『原爆詩一八一人集』に第二詩集の詩「忘れてはいけない」で参加してほしいと連絡をとり、収録してもらえることになった。その詩「忘れてはいけない」を引用してみる。

忘れてはいけない

滅茶苦茶ノ爛レタ顔ノ
ムクンダ唇カラ洩レテ来タ声ハ
「助ケテ下サイ」
静カナ言葉 コレガ人間ナノデス
人間ノ顔ナノデス

（広島原爆記念館掲示パネル・

原民喜『夏の花』より）

あの日から五十年以上の歳月が過ぎた

広島原爆記念館でその詩を

思わず声を出した読みあげた瞬間
小さなパネルの中から
血濡れた手がぬつと突き出て来た
うめき声も聞こえて来る
忘れたい
思い出したくない
日常は時の地底に鎮まっ
起きあがって行くことはないのに
悪夢のような光景がまざまざと呼び醒まされた
鉄の雨で破壊され火にあぶられた
恐ろしい顔 火中からの断末魔の悲鳴

十歳だった

郷里甲府で

空襲の真つ只中を線路つたいに逃げた

棒切れのような黒いかたまりに躓く

老婆が焼け爛れた顔をあげ

どろどろの手をのびして

モンペの足首をつかんだ

「助けて！ 水を 水を！」

その手を声を

払い捨て父の後を追って走った

昭和二十年七月六日

B 29爆撃機一三九機甲府盆地空襲

投下焼夷弾九七〇トン

焼き殺された非戦闘市民一、二七二人

安永さんは自らの幻想力を封印しながら、十歳の時の甲府空襲で体験した事実を二十三篇の詩で記録しようと試みた。安永さんから以前になげこの『七月六日の赤い空』を書こうと思ったのかをお聞きしたことがある。その時に安永さんが語ったことは、ドイツのヴァイツェッカー元大統領の終戦四十周年記念にした演説を読み、そこで語られた「過去に目を閉ざすものは現在にも盲目となる」という言葉から、歴史の悲劇と戦争責任を忘却してはいけないという強い思いを自分も再認識したという。その時に甲府空襲について詩で書き残そうと決意したらしい。安永さんのこの詩集は、多くの反響があり、今でも山梨や空襲の記憶を残そうとする関係者たちから講演の依頼が来ているという。亡くなった浜田知章さんは、ヴァイツェッカー大統領が語った後世の者であっても自国の歴史の戦争責任を担い続けていくという決意を、評論などに書き記している。私も会話の中でもよくその言葉を浜田さんから繰り返し聞いていた。安永さんは甲府空襲で亡くなった一、二七二人の命の重さを背負いながら、この詩集を後

水辺で捕まえた蛭を

「弟の魂だ」と母はいつて

蚊帳の中にはなした

か細い点滅をじっとみつめていた当時の私

爆弾の雨から

炎の中からやっと生きのびてきたのに

この町の川で溺れ死んだ四歳の命

弟から目をはなしたすきの事故だった

幾たびか夢にも見た

記憶の底を流れる川があり

川の底を流れつづける子どもの

流水のように浮き沈みする幼な顔

下流の鉄柵に芥のように引つ掛かっていた弟のからだ

許されない悲しみ

いつまでも過去とならない死者との対話が

私の内部にどのように関わりあい

どのような時間の意味を持ったのか

養殖蛭の水辺をゆらゆらと歩く

あの時の母をこえた老いの影

金網にかこまれた保護地の中から

ふいに幼い瞳に似た光がながれ

世に残そうとした。この安永さんの歴史の根拠を記そうとする試みはとても尊いものだ、と私は考えている。二〇〇七年八月刊行の「コールサック」五十八号は、『原爆詩一八一人集』の書評特集だったが、安永さんに甲府空襲についてエッセイ「十歳の夏あの夜は戦場だった」を寄稿して頂いた。そこで甲府空襲下で父母と子供四人が逃げ惑い、多くの悲劇を目撃しながら奇跡的に生き延びたが、四歳の弟だけが川で水死してしまうことが記されていた。戦後になってその弟のことをノートに記したのを母が読んでしまい、そのノートは燃やされてしまった苦い思い出も語られていた。その弟のことを記した詩「蛭」を引用してみる。

蛭

スカートの裾にすぎるように蛭がとまっている

気づいて声を放つと

黄色い光が儀式のような曲線を描き

漆黒の闇に消えた

益も近い夜の迷い蛭

戦時中

空襲で焼けだされた一家が身を寄せた町

家の前に川があった

闇よりも深い闇をどこまでか

この詩「蛭」を読むたびに十歳の安永さんが生涯にわたり、甲府空襲と犠牲者一、二七人と同時に弟の死を決して忘れることなく鎮魂し続けてきたことを感ずる。清流に生まれる蛭のように弟も川を流れながら生き続けて再び家族の前に現れてほしいという不可能な幻視をこの詩は実現しているのかも知れない。戦争の余波で亡くなった幼児たちの慰霊の思いは永遠に続いていくのだと感ぜさせてくれる。例えばアリズムの詩であっても、先の詩「忘れてはいけない」の一連目「小さなパネルの中から／血濡れた手がぬつと突き出て来た／うめき声も聞こえて来る」のような被爆者の霊を感じてしまうのだ。その詩行や「蛭」においても、安永さんの感受性は眼に見えない他者の存在に気づいてしまう「心象」を招きよせて現実以上の強固なイメージを形作っている。その意味では一見リアリズム詩のように思われても、実は霊的なものを感じて想像力でリアリティを補強した恐るべき詩篇だといえるだろう。安永さんの詩の魅力は、この第二詩集では隠されていたが、本来の安永さんの感受性を露わにした詩篇は書き継がれていて、今回の新詩集に明るみに出されることになる。

が収録されている。一章「音を聴く皮膚」十篇には、安永さんの個性的な感受性によって現実が様々に変形され、歪まされて、現実が豊かな多次元空間に転換されていくような思いがしてくる。詩「音を聴く皮膚」は安永さんの感受性の特長である音感が触感に転移するなどの「共感覚」を露わに示している。インドのシタール奏者の奏でる音色が火傷した手の甲が反応してしまう。そこから入り込んだ旋律やリズムがガンジス河の魚たちなり、飛び跳ねていくのだ。耳が聴こえなくとも皮膚が音楽を触るように聴くことが出来ることを描いてしまうのだ。詩「初夏の蛇」では、木を揺すって蛇を落とす乙女を幻視している。本当に見たことのないシユールリアリズムの世界が紡ぎだされている。詩「木精」では、故郷の山梨の銀杏の太木との対話から成り立っている。詩「さびしい庭」の親子の白猫、詩「静かな夕べ」のムク鳥と少年の交流などを記し、人間が他の生きものと関わりの中から世界の多次元性を感じているように思われる。

二章「海辺の情景」十篇は、旅の詩篇だが、詩「海辺の情景」は画家である安永さんが天才画家の青木繁が描いた「海の幸」の舞台である九十九里浜を訪れてその画家の思いに肉薄していく。また詩「しだれ桜の景」では、しだれ柳を撮影する初老の男が木に寄り添う女を幻視してしまうのだ。安永さんは現実の観光地を見ている他者の心象を垣間見ている。「琵琶湖の十一面観音」、「高野山奥の院」、「深大寺

十三夜祭」などの詩篇で寺院や仏像の前で時空を超えて霊的な存在との想像上の対話も尽きせぬ面白さがある。さらに詩「おちた蝶」では、泥酔して男と二人だけの車輛で恐怖を感じながらも、様々な心象風景が重なり合って独特な詩的世界を形作っていく。これらの詩篇も安永さんの視覚、聴覚、触覚、味覚、臭覚などが重層的に入れ替わっていく「共感覚」の鋭さが生み出したものなのだろう。

三章「彼岸花」十一篇は、父母、義父母、弟たちへの鎮魂詩だ。そのどの詩も繊細で胸に響き渡る詩篇だ。家族にこれだけの感謝の気持ちを背後に秘めて書かれた鎮魂詩は多くはない。安永さんは義父など長年にわたり自宅介護をされていたと聞いている。その閉ざされた日の当たらない家事をこなし、運命的な関わりに感謝を込めてこれらの詩篇を書き上げたのは、きつと多くの介護をされている人びとにも共感されるに違いない。詩集タイトル詩「音を聴く皮膚」を引用してこの小論を終えたい。またカバー挿画は、タイトル詩の「水平線上に沈む陽に染まったターラの魚たち」を安永さんがイメージ化したものだ。詩的な感受性を多様な観点から押し広げようとしている人びとにぜひ読んで欲しいと願っている。

音を聴く皮膚

火傷やけどがなおったばかりの手の甲が

いつの間にか真赤になりけいれんしている

皮膚は覚えていた容赦なく襲った熱を

シタール奏者は激しく弦を爪弾きつづけた

ラビシャンカールの「夕陽のラーガ」^{*1}を

会場はくりかえし打ち寄せる波のターラ*2に熱い海となった

聞き入るわたしは沈む光の飛沫に

全身をぬらし海底に引き込まれてゆく

ラーガとターラのいのちは

新しい皮膚細胞と合体し痛みの振動になった

音がうねる 刺さる

左手で右の腕をかかえこみ躡すくつても

肘から肩へ頭へと受け入れた海は鎮まらず

波は強くなるばかり

一瞬自分を失ったとき

波間をよぎる魚の群を見た

それは聖なるガンジス河の水と共に

インド洋の黒潮にのってやって来て

水平線上に沈む陽に染まったターラの魚たち

ふとラーガの海に浸した手の表皮から

時空を越えてすばやくはいりこみ

熱情の尾びれをはねあげ

腹をくねらせて細胞と交合したのだ

魂がふるえ歓喜することが痛みとなる残酷さ

耳をふさぎ音をさえぎつても

皮膚は感応し音を聴いている

耳の不自由な人たちが

大きな風船を両手で抱いて

演奏を聞いているのをみた

掌が音を受けとめ震える

耳というオルガンがなくとも

目で指先で足裏で音を感じている

今わたしの手の甲も

*1 ラーガ||インド音楽の旋律

*2 ターラ||インド音楽のリズム